「大地震～原発への発言」はどのようにして成立するのか

劇作家で演出家、役者でもある野田秀樹さんが、『アエラ』に連載してきたエッセイ「ひつまぶし」を２０１１年４月４日号をもって最終回とする挙に出たことを、同号で報告しています。《先週号のアエラの表紙を見て私は愕然とした。「放射能がくる」という大きな赤い文字が、防毒マスクのようなものを被った男性の大写しの顔の上で躍っている》ことに、違和感を覚え、《このアエラの「現実」に対する姿勢への不安が消えません》と書かれています。

野田さんはアエラの編集部にこう問うています。《「放射能がくる」には、どんな願いが込められていたのですか？これから大量の放射能が来て欲しいのですか？来た時に「ほらね、俺の言った通りだろう」と言いたいのでしょうか？もしもそうではない、というのであれば、ただでさえ放射能のことでドキドキしている何も知らない人々が、ただただ煽られるコトバのように聞こえます。これは、私との語感の違いなのでしょうか？この表紙を見た人が一体どういうメッセージを受け取ればいいのですか？》

目次には「東京に放射能がくる」と書かれ、《「最悪なら『チェルノブイリ』」という脅し文句が続く》のをみると、《「東京から逃げ出せ！」というメッセージなのか？ガソリンを買いだめして脱出する準備をせよ、という風に受け取ったとしても仕方ない。アエラは、それほどの事態だと大きな赤文字で私たちに呼びかけたわけだから。》フィクション雑誌ではなく、《事実を元にして記事が書かれている》はずのアエラが、「東京に放射能がくる」といい、《しかも最悪の事態はチェルノブイリなのだと断言まで》し、自分の《暇つぶし》のエッセイで、《「東京はまだ放射能がきたというレベルではない。冷静になって、罹災地である東北を、福島を支援するべきだ」という趣旨のことを書》いているのに、《立場が逆転している》。

《一体どんな根拠で、あの表紙が物語っているほどのレベルの放射能が、現時点で東京にくるのか、そして、最悪の事態がチェルノブイリ―なのか、教えて欲しい。おそらく私は、この原発事故をアエラほどに軽く考えていない。今、起こっていることは、ふだんマスメディアが、面白半分で人々を煽るような次元のこととは違うと思っている。これからの日本の経済、文化、社会すべての将来に関わる大事だと思っている。だからこそ、まずは福島の現地が問題なのである。放射能がこのまま少しでもおさまり、福島や茨城への被害が最小限におさまっていくことを祈るべきだし、その方向にむかって、東京も最大限の支援をするべきだ。東京に危険がないとは思っていない。でも、今は東京がじたばたする時ではない。危機にある時、その危機を煽っても、その危険はなくならない。危険を出来るだけ正確な情報でそのまま伝えること、これがまっとうなマスメディアのやることだ。》

自分が毎週連載している《アエラが、まさか、より刺激的なコピーを表紙に使い人々を煽る雑誌だったとは気がつかないでいた。誰に謝ればいいのかわからないが、申し訳ない。故にこの回をもって、この「ひつまぶし」を終了させていただくことにした。長らく、この「ひつまぶし」を御愛読してくださった読者には、心から感謝をしています。身勝手なモノカキのわがままではありますが、先週号の表紙を見て、直感的に覚えた、このアエラの「現実」に対する姿勢への不安が消えません。》

野田さんの抗議の主意を正確に伝えようとして、できるだけ多く彼の文章を引用してきましたが、アエラ編集部は同号誌面の末の「編集長敬白」では、《アエラ先週号の表紙及び広告などに対して「不安を煽る」「不快である」とご意見、ご批判をいただいています。編集部は恐怖心を煽る意図はなく、原発事故の深刻さを伝える意図で写真や見出しを掲載しましたが、不快感、不安を抱かれた方に対し

まして、深くお詫び申し上げます。今回いただいたご意見、ご批判を真摯に受け止め……》と、通り一遍でしかないものの、野田さんと同じように感じる読者がいたことに目が止まり、野田さんだけの過敏すぎる反応ではないことを確認しました。私自身、その号をまだ目にしていないので、その表紙に対して何も言えないが、私の居住地の関西と大きく異なって、東京では危機感が押し迫っていることも野田さんの文章からはっきりと伝わってきます。

アエラの他の執筆者で先週号表紙について、何らかの反応を示した人は見当たりません。野田さんが「最終回」を宣言した４月４日号には、震災についての養老孟司氏と内田樹氏の対談や、高村薫氏のエッセイも掲載されていますが、先週号については触れられていません。野田さんの「最終回」宣言をおそらく目にしたであろう次の４月１１日号でも、放送作家の鈴木おさむ氏が先々週号表紙には愕然としたと述べ、《AERA も変わるはずです。あの号の発売以来、いろんな所で叩かれて、大変なことも多かったと思いますが、AERA がどのように変わっていくのか、本当に楽しみにしています》と、AERA の応援団を買って出ているのが目につくぐらいです。

野田さんの「最終回」宣言は、それまでの「ひつまぶし」と較べて非常に熱心に読みました。初めて読むに値するものを「最終回」で出会った気がしています。野田さんの言わんとしているところはよくわかるし、共感さえ抱きますが、それ以上に野田さんが自分の文章を掲載している雑誌に問いを向けた、ことに関心を引き起こされたのです。自分の文章が原稿料と引き替えに掲載されて、多くの読者に読まれればいい、とだけ考えている書き手ではなかった、ということに目を釘付けにされたのです。野田さんとすれば、《アエラの「現実」に対する姿勢への不安》から、「最終回」宣言に踏み切ったのでしょうが、自分の文章が掲載されている足下の雑誌に目を注がなければ、「最終回」宣言という行動は突き上がってきません。

野田さんの「最終回」宣言は、アエラの他の執筆者の反応も呼び起こさなかったように、マスメディアでも全く取り上げられませんでしたが、それはメディアと同様に、執筆者たちのメディアへの取り込まれ方への鈍感さ、退廃を浮かび上がらせている点で、重要な意味をもっています。野田さんは「最終回」宣言によって、自分の文章と掲載雑誌との関係を問いかけていたからです。こんな雑誌にこれまで自分の文章が連載されてきたことが、大震災～原発事故を機に明らかになったということによって、「最終回」宣言こそはなによりも大震災～原発事故への最大の発言としての意味をもっていることに気づかなくてはなりません。

地震についてであれ、なにかについてであれ、雑誌に掲載される文章の中でいいことを言ったり、マシなことはいくらでも述べられるが、それらは所詮、言えることを言っているにすぎないのです。文章の中で怒ったり、嘆いたり、ほくそえんでいるだけのことであって、すべて「現実」と接しないフィクショナルな心の起伏にすぎず、「現実」へむかっての跳躍はそれらの文章から生み出されません。自分の文章の掲載基盤に無関心な知や言葉は、生きる「現実」をかかえ込まないからです。「現実」から摑まれず、「現実」を摑まえることのない言葉は、商品として飾られていくだけでしょう。

野田さんの「最終回」宣言だけが大震災～原発事故にかかわる状況に切り込みえたし、その分発言として成り立っていた、と私は考えます。実際、東京に「放射能がくる」なら、文章を書くどころではないし、雑誌発行どころではないでしょう。連載の「最終回」宣言は、人生の「最終回」宣言と重なってくるにちがいありません。もちろん、野田さんの「最終回」宣言は連載の「最終回」宣言ですが、放射能問題に人生の「最終回」宣言まで連想させるように向き合おうとしていた、底が突き抜けた真摯さを引きずっていることが大事であり、それをみなくてはならない。アエラという雑誌への「最終回」宣言が問題ではないのです。アエラにつながってくるすべての関係への「最終回」宣言の入り口にあることが、問題とならねばならないのです。